| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 科目分類 | 専門科目群−専門導入科目 | | | 対象学年 | 1 |
| 授業科目 | 北東アジア超域研究総論 | | | 学期 | 春学期 |
| 代表教員 | 福原　裕二 | | | 選択/必修 | 必修（北東アジア専攻） |
| 科目コード | H902101 | 授業形態 | 講義 | 単位数 | 2.0 |

| | |
|---|---|
| 授業の概要 | 　この講義では、一国一地域に収まらない問題群を扱う「超域研究」を論じる。北東アジア研究科が考える「超域研究」とは、“何らかの「域」をこえて運動する事象や主体の拡散と収斂”に着目し、人文・社会科学の諸方法をもって行う研究である。担当者は、①それぞれが行っている超域研究にもとづく講義、②その研究に密接に関係する「超域的研究」の紹介と分析、を行い、受講生に「超域研究」を各自の研究枠組を構想する場合の一選択肢として理解させることをめざす。 |
| 授業の内容 | 第0回 導入（福原裕二）<br>この講義のねらい、講義進行、成績評価方法などを簡単に説明する。<br>＊この0回の「導入」は、次の第1回授業のなかで行います。<br><br>第1～3回 福原裕二　【韓国・北朝鮮、予防外交と紛争、市民社会】<br>朝鮮半島をめぐる国際関係・紛争を事例的に検討するなかで、なぜ北東アジア研究に超域的視点が重要なのかを考えてみたい。ここで取り上げる国際関係・紛争とは、北朝鮮の核兵器開発問題と日本に関わる領土問題である。まずは国際政治における超域的現象、そのなかでの拡散と収斂について思考をめぐらせてみる。これを踏まえて、北朝鮮の核兵器開発に内在する問題の超域性、また日本をめぐる領土問題が秘める三重の超域性を明らかにしていく。最後に、問題の解決を多者安保体制、（海の）公共財化の観点から考察することで、北東アジア国際関係の構造と力学（現実主義の壁）を浮き彫りにする。<br><br>第4～5回　中村圭　【中国、経済発展と高度人材の国際流動、中国的経営、ジェンダー】<br>中国は、社会主義計画経済時代の一つの組織（単位）で一生安泰なはずの生涯をおくっていた社会から、改革開放後の十数年間というごく短期間で頻繁な職業流動が当然の社会へと移行、同時に未曾有の経済発展を遂げている。本講義は、第4回で人材の職業流動とそれらを受容しながら経済成長した中国社会および組織のしくみについて、ミクロ・メゾ・マクロの各レベルで解き明かす。一方で、人材の流動化は有能な人材の登用とダイバーシティの促進につながるはずなのだが、なぜうまくいかないのか。第5回では、女性労働の参入パターンとライフコースにより、ジェンダーの視点から日本と中国社会を比較分析する。<br><br>第6～7回 豊田知世　【資源エネルギー、経済発展と環境、地球環境問題、持続可能な開発】<br>経済発展の過程で発生する環境問題は、地域的な問題から国境を越えた地球規模の問題まで、さまざまな環境問題が発生している。本講義では、まず環境問題がなぜ発生するのか経済的な視点から説明する。そして、地域や地球規模の環境問題に対して、発展段階によってどのような特徴があり、またどのような環境政策が必要になるのか、いくつかの事例を挙げながら紹介する。地域や国境を越える環境問題、時間や世代を超えて影響が出る環境問題など、ジェンダーによる環境影響の違い、経済分野の政策が自然環境に与える影響など、さまざまな域を超える超域研究の視点から、環境問題について捉えられるようになることを目的としている。<br><br>第8～10回 渡辺圭　【キーワード：、ロシア、キリスト教、越境布教】<br>ロシア語の記述文字は、修道士であるキュリロスとメトディオスの二人が、現在ロシアで用いられている「キリル文字」（厳密に言えば原型のグラゴール文字を発明）をスラヴ人に適用したことに端を発する。この「キリル文字」は、ビザンツの東方キリスト教の布教を目的として創出されたものであった。ロシア文化を学ぶ上では東方キリスト教の研究が不可欠である。日本にロシア正教を布教したのは、大主教ニコライ・カサートキン（1836-1912）であるが、彼は聖書を日本語に訳出するという偉業をなしている。ニコライ・カサートキンの訳業では、漢語が立脚点となっているが、注目すべきは、彼の東方キリスト教の日本に対する布教において多国間の文化の相互の影響が顕著だということである。<br>本講義では、キリスト教そのものが「言葉の宗教」である、という前提から出発し、その布教のための「越境」、「言語の多用」の問題を中心として授業を行う。プラトンのイデア論では、イデアを受肉したものが現実存在であるとされているが、本講義はこのプラトニズムに立脚して論を進める。<br><br>第11～13回 井上治　【モンゴル・歴史・文化触変】<br>機動性に富むモンゴル遊牧民たちは古来より周辺諸地域との交渉を活発に行い、数多くの文化交渉を |

| | |
|---|---|
| | 経験してきた。これを超域研究の枠組でとらえ、外来文化の受容と既存文化の変容過程、変容から定着に至る過程、その定着した文化が新たな外来文化の影響で再び変容する過程やそれが他の地域に波及してゆく過程を“文化の拡散・収斂運動”としての「文化触変反復モデル」に仕上げ、超域文化理論に昇華させようとしている試みを論じる。講義ではまず文化触変理論を説明し、次にこのモデルによる事例分析を解説する。なお、もし時間があれば、絶滅危惧言語のことにも論及したい。<br><br>第14回 総括：北東アジア超域研究の展望（全担当教員）<br>講義で示された問題群を超域的に研究した結果、見えてくるものは何か。それは、“何らかの「域」をこえて運動する事象や主体の拡散と収斂”の中に存在する人間とその営為の姿であろう。総括として、担当者全員が北東アジア超域研究を国家、そして、人間の存在そのものを問い直す学問として定置しようとする試みをめぐって議論を展開する。<br><br>第15回 ディスカッション（全担当教員）<br>講義を通じて体得した「超域研究」を受講生はどのようにとらえ、どう向き合うかを述べ、それをめぐって全員がディスカッションする。 |
| テキスト | 特定のテキストは使用しない。 |
| 参考文献 | 各担当教員は以下を参考文献として使用する。<br><br>（福原）<br>➢池内敏『竹島—もうひとつの日韓関係史』中公新書、2016年。<br>➢福原裕二『北東アジアと朝鮮半島研究』国際書院、2015年。<br>➢ドン・オーバード-ファー、ロバート・カーリン著、菱木一美訳『二つのコリア：国際政治の中の朝鮮半島』共同通信社、2015年。<br>➢木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』岩波書店、2015年。<br>➢琉球新報・山陰中央新報『環りの海 竹島と尖閣 国境地域からの問い』岩波書店、2015年。<br>➢本田良一『日口現場史 北方領土—終わらない戦後』北海道新聞社、2013年。<br>➢三村光弘『現代朝鮮経済：挫折と再生への歩み』日本評論社、2017年。<br>➢濱田武士・佐々木貴文『漁業と国境』みすず書房、2020年。<br><br>（中村）<br>➢中村圭『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』勁草書房、2019年。<br>➢瀬地山角編著『ジェンダーとセクシュアリティからみる東アジア』勁草書房、2017年。<br>➢瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、1996年。<br>➢西原和久『トランスナショナリズムと社会のイノベーション—越境する国際社会学とコスモポリタン的志向—』東信堂、2016年。<br>➢坂部晶子『中国の家族とジェンダー—社会主義的近代化から転形期における女性のライフコース』明石書店、2021年。<br><br>（豊田）<br>➢バリー・C・フィールド『環境経済学入門』日本評論社、2002年。<br>➢ジョン・ディクソン他『環境はいくらか 環境の経済評価入門』築地書館、1991年。<br>➢D・H・メドウズ他『成長の限界：ローマクラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社、1972年。<br>➢マイケル・P・トダロ他著『トダロとスミスの開発経済学（原著第10版）』、ピアソン桐原、2010年。<br><br>（渡辺）<br>➢パーウェル・エフドキーモフ著、古谷功訳『ロシア思想おけるキリスト』あかし書房、1983年。<br>➢セルゲイ・ボルシャコーフ著、古谷功訳『ロシアの神秘家たち』あかし書房、1985年。<br>➢大木昭男『現代ロシアの文学と社会　「停滞の時代」からソ連邦崩壊前後まで』中央大学出版部、1993年。<br>➢A..ローテル・斎田靖子訳『無名の順礼者　あるロシア人順礼者の手記』エンデレル書店、1998年。<br>➢御子柴道夫『ロシア宗教思想史』成文社、2003年。<br>➢御子柴道夫『ウラジーミル・ソロヴィヨフ　幻視者・詩人・哲学者』岩波書店、2011年。<br><br>（井上）<br>➢平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。<br>➢井上治「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察」、『北東アジア研究』別冊1、2008年。<br>➢金日宇『韓国・済州島と遊牧騎馬文化』、明石書店、2014年<br>➢デイヴィッド クリスタル『消滅する言語—人類の知的遺産をいかに守るか』、中公新書、2004年。<br>➢松原好次ら『言語と貧困—負の連鎖の中で生きる世界の言語的マイノリティ』、明石書店、2012 |

| | |
|---|---|
| | 年。<br>➢E.コセリウ『言語変化という問題――共時態、通時態、歴史』、岩波文庫、2014年。 |
| 評価方法 | 出席回数、授業やディスカッション参加への積極性、全講義終了後に提出を求める「超域研究による自分の研究テーマの展開」についてのレポート（4,000字～8,000字）の内容によって評価する。<br><br><成績評価方法に関して><br>以下の基準で採点し、各点を平均して成績を評価する。<br><br>①出席について…欠席をしないこと。とくに第15回目の講義を欠席した者（全講義を通じて学んだことを確認できないため）、各講師が担当する4回の講義のうち2回以上欠席した者（当該講師の講義内容を半分以上理解していないと考えられるため）、には単位を与えない。全回出席した者には出席点100点を与え、1回欠席するごとに20点を減じる。出席点が59点以下の者（全15回の講義を通じて3回以上欠席した者）には単位を与えない。<br><br>②講義中の態度…講義には積極的かつ真剣な態度で臨むこと。とくに第15回目のディスカッションの姿勢は評価の対象となる。各自5分以上（10分以内）のプレゼンテーションで、「超域研究」をどのように理解したか、「超域研究」はどのように各自の研究に生かせると考えているかを述べること。「超域研究」の考え方を自分の研究に生かせない場合にはその理由を述べること。ここでレジュメ作成は求めないが、各自メモを作成してくることが望ましい。要件を満たしたプレゼンテーションをおこなった場合には80点を与える。全員のプレゼンテーション終了後には受講生中心にディスカッションをおこなう。とくに、各自の「超域研究」に対する理解と研究への応用についての考え方を踏まえて、他の受講生のプレゼンテーション内容と担当講師の考え方に対する批評を歓迎する。ディスカッションにおける積極性に対して最高で20点の評価点を加点する。<br><br>③レポート提出…全講義終了後、1週間以内に提出を求める。「超域研究による自分の研究テーマの展開」（4,000～8,000字）の内容を100点満点で評価する。期限までに提出しない者には単位を与えない。 |
| 参考URL | |
| その他 | 本講義は、シラバス作成時点では「対面授業」を想定して記載しています。やむを得ない事情により「遠隔授業」となる場合には、シラバスの内容が一部変更になることがあります。その際には追って案内を行いますので、担当教員の指示に従ってください。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 科目分類 | 専門科目群－専門導入科目 | | | 対象学年 | 1 |
| 授業科目 | 開発政策総論 | | | 学期 | 春学期 |
| 代表教員 | 林　秀司 | | | 選択/必修 | 必修（地域開発政策専攻） |
| 科目コード | H902102 | 授業形態 | 講義 | 単位数 | 2.0 |
| 授業の概要 | 開発政策に接近する仕方は、社会学、経済学、政治学と学問分野によりさまざまであるが、本年度の当授業の前半は、そのひとつとして、経済地理学からの接近法を取り上げてみたい。その際、社会科学に関する学習経験が少ない受講者を想定して、当該専門分野の基礎的な考え方を教科書を用いながら検討していくこととする。ただし、教科書以外の文献も随時利用する。授業形態は講義ではあるが、受講者の積極的な参加を期待する。（以上、林）<br>経済活動を支えるインフラは、その整備とともに維持管理が大きな課題となっている。特にわが国の場合は、老朽化したインフラの更新および、地方では人口減少に伴う利用低迷など、コストは拡大すると見込まれる。このとき、政府・自治体・民間はどのような役割を担うべきか。日本国内を中心に、現状把握と課題などを把握しながらディスカッションする。なお、受講生の関心にも注意しつつ、教科書・参考図書は選定する。（以上、西藤） | | | | |
| 授業の内容 | 第１回 企業<br>第２回 イノベーション<br>第３回 産業立地<br>第４回 集積<br>第５回 地域格差<br>第６回 グローバル化<br>第７回 持続可能な発展<br>第８回 予備日<br>第９回 インフラ整備における国の役割<br>第１０回 民間活用の模索<br>第１１回 老朽化の問題<br>第１２回 民間によるインフラ運営<br>第１３回 民営化は万能か<br>第１４回 疲弊する地方のインフラをどう維持するか<br>第１５回 予備日 | | | | |
| テキスト | 【林】<br>青山裕子・マーフィー, J. T.・ハンソン, S.著，小田宏信・加藤秋人・遠藤貴美子・小室譲訳 2014.『経済地理学――キーコンセプト』古今書院．Aoyama, Y., Murphy, J, T., Hanson, S. 2011. Key concepts in economic geography. London: Sage.<br>【西藤】<br>受講生と相談しながら教科書を指定する。 | | | | |
| 参考文献 | 【林】<br>随時紹介する。<br>【西藤】<br>・加藤一誠, 手塚広一郎（2014）『交通インフラ・ファイナンス』 (日本交通政策研究会研究双書) 成山堂書店 | | | | |
| 評価方法 | 平常態度で評価する。（出席20%、課題80%） | | | | |
| 参考URL | | | | | |
| その他 | | | | | |